

一昨年の秋、かつての太平洋戦争の激戦地硫黄島を訪れる機会があった。返還直後の昭和44年に一度調査をした時以来15年ぶりだったが、この島の自然と人文の様相に大きな変化はみられなかった。噴気孔ふきんの地熱活動や新しい隆起丁線のしめす海岸地形の特色は、特異な火山島として以前から知られていた状態のままであり、自衛隊基地のある平坦地の殺風景な景観が、ギンネムやガジュマルなどの侵入種の植生で一そう荒涼たるものになっているのも想像どおりであった。元日本軍の壕内に、暑気と湿気の中で2カ月間たてこもったあげくに死んだ兵士の遺品が、まだ無造作に置かれたままになっていた。

昨年の6月、硫黄島旧島民の帰島の可否を議するためにかれた小笠原諸島振興審議会で、硫黄島での住民の定住は不可能との結論が満場一致で採決され、政府への答申案となって旧島民の帰島への願望は絶ち切られた。昭和15年10月の硫黄島村(当時)の人口は184世帯1051人と記録されており、昭和19年3月に強制移住させられる直前には1200人位が住んでいたとみられている。最近(昭和55年の調べで)旧島民の生存者は伊豆大島、八丈島その他に散らばって約半数になったらしい。さらに今帰島を願っている人がその何割であるかは確認できないが、かつて私有地を持ち、さとうきび栽培に精を出していた人達の島への愛着は絶ち難いものがあるろう。畑、山林、原野を合せて828ヘクタールの民有地があったと記録にあるが、現在それらの土地所有権登記はどうなっ

ているだろうか。

前述の審議会の定住不可との結論の理由は、火山活動の継続を第1とし、産業の成立条件が厳しいこと、および戦禍の後遺症を加えている。火山活動については、火山研究者による精細な調査報告に基づくもので尊重すべきであるが、この報告内容は誇大に評価されてはいないか。戦前までは居住者が生計をたてていたものであり、最近の火山活動がとくに顕著になりつつあるとみる証拠は薄いのではないかと、との疑問もある。一方、不発弾の処理が終っていないことや遺骨の蒐集さえすんでいないからとの理由は、今まで政府が何もしなかったその怠慢を追認せよというに等しいとする、帰島促進協議会の意見があることも聞いている。

一方では自衛隊基地が存続し、日本の最南端の防衛の要にもなっていると見られる限り、審議会の決定は大きな意味をもっていたと考えざるを得ない。さらに文末になって筆者自身の反省を告白しなければならない。実は筆者も小笠原振興審議会の一員で、満場一致(あえて政府方針の原案に)賛成した一人である。生来の口の重さにもよるが、審議会の席上で質問も出せなかった自分の弱さを感じている。一抹の不安(疑義)がある——それは自然科学の調査結果が政府施策に好都合な形に利用されたとしたら、この国ではゲオポリティクの現代版がまかり通ることになる。

リエージュの二つの教室

式 正 英

1972年にミュンヘンとウブサラに長くいて以来、1976年のIGCの折のヨーロッパ・ロシア訪問を除けば、1983年のベルギー訪問は私にとっては本当に久しぶりのヨーロッパであった。これではすみがついて昨夏(1984年)もフランスとスイスを回って来た。ベルギーはアフリカへ渡航する場合の通過点だが、折角のヨーロッパへの足がかりを無駄にするのも惜しく、ザイルの帰途リエージュを訪問することにした。

サベナ航空のDC10型機はキンシャサから10時間ほど

の一飛びで、10月20日朝の5時にブリュッセル、サベンテム空港に着く。サハラ沙漠は夜の漆黒にかくれたままだったが、ヨーロッパに安着してみると暗黒のアフリカ大陸から解放された実感がこみあげて来てさすがに嬉しい。アレキサンドル・ピール夫人のすすめで、リエージュへ直通のリムジンバスに乗る。日本を出る前に和田明子先生に教えていただいたミューズ川沿いのホリデーインに宿をとる。同ホテルは高からず安からず、適当な設備で、何よりも英語が通じやすいので都合がよい。何し

ろベルギーは北半はフラマン語圏、南半はフランス語圏で、リエージュは後者を代表する都市であり、ワロン運動が盛んだから街中でも英語は殆んど通用しない。

アレキサンドル・ビール夫人はジャン・アレキサンドル教授の奥さん（ビールは結婚前の旧姓）だが、自らも地形学者である。リエージュでの案内は一切引き受けようという夫人の親切に甘えることにした。早速午後には迎えに来て下さり、リエージュ大学の自然地理学教室を案内して下さい。100年ほど前の古い建物で、後から中二階を継ぎ足したりして部屋を増やした様子もあり中の構造は複雑である。そこでアレキサンドル一家つまり歴史学者の子息ピーターや二人の娘さんなどに紹介された。教授の主宰する講座で夫人も講師をつとめ、御子息も同じ大学に勤めている関係もあるが、教室すなわち家庭の延長といった趣きなのはいささか驚いた。教室の名称に熱帯地形・気候・水文教室の副題がついており、都市気候のエリクム氏からもリエージュの気温分布や大気汚染の説明をうかがえた。この大学の同窓生の御夫婦が教室を運営されているのだから、雰囲気は和やかで暢気な感じだが、夫君が兼務先のザイルの大学へ出かけて長期間留守にしてもうまく運ぶための仕掛けのようでもある。

同じ大学にピサール教授の主宰する地形学・第四紀地質学教室がある。翌21日は朝からその教室のシャベル氏の案内で、ミューズ川対岸の城趾付近にある野外観測場を見に出かけた。アルデンヌ高原につづく緩やかな丘陵斜面でのマスウェースティングの観測が地味に続けられていた。ピサール教室の方はメートルアシスタント（日本の大学の専任講師に相当する）が5、6人もいて、その午後は入れ代わりで現在研究中のテーマを説明して下さい。土じょう侵食のボリース氏、海岸地形のオザール氏、カルスト地形のエック氏などが次々と現われ、まことに熱心そのもので全体が活気に溢れていた。私もその気分につられて日本から持参した有珠岳のスライドを映写して説明してみた。「1日1メートル隆起する異常さ」に驚いた先生方は、もう少し滞在を伸ばして詳しく説明してくれないかと申し出る程であった。

同じ大学の自然地理関係の教室でさえ、互いに内容も気風も驚くほどに異なるものだという感概をもったのだが、これがヨーロッパの故だとも思えるし、大学というものだと云う風にも思える。そう言えば本学でも研究室の部屋ごとに先生によって机や椅子の配置から室内のおもむきが全く異っているようだ。

(1985年1月31日)

イギリスの万里の長城

井 内 昇

敵軍の進攻を高い壁を築いて防ぐ、という戦術的発想は、古くは中国の万里の長城を生み、近くは同種のものとして第1次・2次大戦で独・仏国境線沿いに、地下要塞マジノ線、ジークフリート線の構築となってあらわれた。ベルリンの壁もこの発想の延長であろう。しかし、団廓都市のように狭い区域を城壁でとり囲んで防衛する場合と違って、広い平面上に線状の障壁を築いても余り有効とは思えない。史上最大規模の中国の長城は、最近新生中国の観光名所として外貨獲得に貢献しているらしいが、この長城は本来の目的である北狄の南進防止の役には立たなかったし、マジノ線、ジークフリート線も結局は敵の進攻を防げなかった。にもかかわらず、人間は古今東西を通じて同じ発想をくりかえし、各地にこの種の長城の例をみることができる。

このような長城の中で、意外に知られていないのがイギリスの長城—ハドリアヌスの長城—であろう。この長城は、紀元1世紀にブリテン島に侵攻したローマ軍が、

スコットランドの蛮族の北からの攻撃を防ぐ目的で2世紀初めに築いたもので、ブリテン島の東西の幅が最も狭くなる北海沿岸のタイン川河口から西のアイリッシュ海沿岸ボウネスまでの約120kmの間に構築されている。

昨年8月、IGC出席の折、イギリスの地方都市と農村部を見たいと思い、約10日間、レンタカーでイングランド、ウェールズ、スコットランドを一人で旅行した。この機会に途中でこの長城に寄ろうと考えたが、日本でも、ロンドンでも具体的な情報は手に入らない。しかしイギリスで入手した40万分の1地形図をみると、城壁の所在を示す記号が断続して記入されている。そこで地図上に城壁の記号が最も長く残っている所に行くことにした。8月某日、朝早くミドルズブラの町を出発、途中タインサイド重工業地帯の中心サンダーランドの斜陽化の現状を観察し、ワシントンニュータウンに立ち寄り、1時過ぎ、長城に近いコールブリッジの町に着く。町の中心の案内所でわかったことは、この長城はイングランド